

## 「平和の俳句」

2022年09月05日

「東京新聞」で「平和の俳句」が8月1日から31日まで、一句ずつ掲載された。前半の句については、17日のホームページに載せた。今日は、後半の句を紹介し、私の短いコメントを書きたい。金子兜太氏といとうせいこう氏を選者にして、2014年から始まった「平和の俳句」を楽しみに、愛読してきた。名もない、ただの市民が平和に関する句を詠むことが、平和を生み出していく根源的な力になると信じているからである。

「平和は平和守って平和なり 福田きく（94）東京都文京区」投句者の中で、二番目の高齢者である。アジア・太平洋戦争を経験し、苦労を重ねた人生を生きて来られたのではないか。平和を守ることによって平和を実現する。最も単純な言葉で、直截に平和を作り出す方法を詠んで、皆で平和を守ろうと訴えている。日本国憲法は、戦争はしない、平和に生きると謳っている。この憲法を実現し、世界にアピールしていくことが、戦争の惨禍をアジアに広げて、自らも傷んだ日本の使命ではないか。

「戦争をしなければ解決できないの？ 横田竜馬（15）岐阜県川辺町」投句者の中で、二番目に若い人である。世界で、戦争が止んだ時はない。なぜ、戦争は起きるのか。誰もが疑問に思う。そして、戦争をしなければ、解決を見出せないのかと思う。横田君は、その疑問を率直に詠んでいる。戦争で決着をつけようとする愚かさを悟っているのではないか。大人は、戦争をしなくても、理性と勇気で解決できる道を示す責任がある。

「人が死んで勝ちも負けもあるものか 兼子明（62）浜松市北区」20世紀の初頭までは、日本が、朝鮮、中国、東南アジアに攻め込み、資源などを収奪し、利益を上げてきた。しかし、第二次世界大戦後においては、侵略戦争はできないし、大国が敗北する状態になった。ベトナム戦争では、米国が多大な兵力をつぎ込んだが、無残な敗北で終わった。ソ連はアフガニスタンに侵攻したが、ゲリラ戦で苦闘し、敗北、撤退した。米国は多国籍軍と組んで、アフガニスタン、イラクを攻撃したが、両国から撤退せざるを得なくなった。撤退させた後でも、両国は混迷を深めている。今日、戦争で勝利しても、利益を得ることはできない。相互に深い悲しみと傷を残すだけである。

「焼爛（ただ）る戦車は枢（ひつぎ）春の泥 日比史朗（90）愛知県一宮市」テレビで、ロシア軍の焼け焦げた戦車の映像が写し出され、ウクライナ軍の戦利品のように展示しているのを見る。ロシア軍の無差別攻撃によって、一般市民が殺されることに心が痛み、許せないと思う。一方、戦争に動員された若いロシア兵も、戦車を枢として無残に殺されている。人は命を与えられ、その命を燃焼して生きたいと誰もが望んでいる。それを、無慈悲に中断される無念さは、察してあまりある。「春の泥」は田植えの泥でいい。

「ウクライナの平和みるまでいのち欲し 山田範子（93）福井県大野市」山田氏は、毎日、ウクライナに関する悲惨な戦争報道を見て、心を痛めている。そして、停戦協定が今日結ばれるか、明日結ばれるかと、平和が来る日を待っている。93歳になり、自分の命は長くはないが、ウクライナの平和を見届けるまでは、生きたいと詠む。理由はどうであれ、プーチンの始めた戦争は多くの人を殺し、傷つけ、世界中を不安に陥れている。

「躍った叫んだ！走り出した終戦の日 立石百代子（87）福井県敦賀市」どこかの女子大で、終戦の日、穿いていたモンペを脱ぎ捨て、スカートに着替え、校庭で輪になってクルクルと回り、踊る彼女たちの美しさを屋上から見たという、文章を読んだことがある。女性のおしゃれは平和が保障する。おしゃれを楽しむ時代を捨ててはならない。立石氏も終戦を躍り上がって喜んだのであろう。